

(1) 成果

本キャンプは、3年間（昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響により中止）の「限界突破キャンプ」の完結編である。

○参加者満足度

満足 17名（100%） やや満足 0名 やや不満 0名 不満 0名

参加者 17名全員が、上毛三山の妙義山（金洞山）、榛名山（榛名富士）、赤城山（鍋割山・黒檜山・駒ヶ岳）を全て踏破することができた。（総距離約 48km、累積標高差約 2800m）

①新型コロナウイルス対策の徹底

新型コロナウイルス感染症対策のポイント（P8・10 参照）を明確にし、職員・ボランティア・参加者が常に意識することで、安心安全にキャンプを実施することができた。

②協働的な活動プログラムの充実

自己肯定感を高めていくために、「他者と協力する場面」と「人の役に立つ、人から褒められる、感謝される」経験がたくさんできるように、協働的な活動プログラムを意図的に多く設定した。日程の後半になると、ふりかえりシートで、他者から感謝されてうれしかったことや励まされて元気が出た等の記述が見られるようになった。

③ふりかえりの充実

全日程を通し毎日、参加者が自分を見つめるふりかえりの場を設けた。自分の立てた目標が達成できたかを確認し、ふりかえりの場では、一人ひとりが翌日に頑張る目標を考え、目的意識を持って活動に向かわせた。

ステージごとの目標に対して、スタッフの参加者へのかかわり方を統一し、声かけをする場面や、内容についてスタッフによって異なるようにして、活動への参加を促すことができた。

(2) 課題

①グループ編成の人数

1グループの人数（6人）が多く、1日のふりかえりや、野外炊事等の活動を行う際に、意見の交換や、役割分担等で滞る場面が見受けられた。滞らないためにはどうしたらよいか今後検討していく。

②登山を行う際の、連絡体制・人員配置等、緊急時の対応

登山等の危険が伴う活動で、不足の事態が起きた場合を想定すると、山での危険ポイントや、グループに随行する人数配置と緊急対応する人員配置、また、事前にスタッフに何を担当してもらうか等をより明確に考えておく必要があった。登山では、全行程を完遂することができなくても、様々な事が起きる可能性を考慮して、進めていくことが大切である。

③参加者募集の方法

遠征型のキャンプになるため参加者とその保護者、スタッフの目的意識をより近いものにしていくために、事前に参加する子供と保護者に対して、応募時に応募理由や目標等の意思を確認する課題提出を求める方法も考えられる。

(3) 推進委員より(五十音順)

自分の限界に挑み続けた子供たちの成長

國學院大學人間開発学部 准教授 青木 康太郎 氏

前回に引き続き、推進委員として調査研究を担当させていただきました。今回は、1泊ですが、キャンプにも参加し、子供たちと一緒に榛名富士登山やピザ作りに挑戦しました。残念ながら赤城山縦走には行けませんでした。短い期間ながら子供たちと過ごすなかで、この子供たちなら最後までがんばってくれると確信していたものを感じたのを覚えています。そして、研究の結果、限界突破キャンプの体験を通じて、子供たちのやり抜く力や自己肯定感が向上していることが分かりました。キャンプの効果は数字だけで表されるものではないですが、8日間、自分の限界に挑み続けた子供たちの心はいつしかしなやかにたくましく育っていったのではないかと考えています。限界突破キャンプに参加した子供たちが、この経験を糧に、これから人生で大いに活躍してくれることを期待しています。

上毛三山制覇!!

群馬県立妙義青少年自然の家 社会教育主事 青山 裕也 氏

令和3年7月10日～11日の限界突破キャンプ「事前キャンプ」に県立妙義青少年自然の家職員として参加者の皆さんと過ごすことができました。私自身、令和元年度から限界突破キャンプの推進委員として参加させていただき、上毛三山のひとつである妙義山の登山に向け、登山時期やコース等を検討してきました。昨年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により残念ながら中止となりましたが、今年度は無事に妙義登山を実施することができ、2年越しの上毛三山制覇を達成することができました。

国立赤城青少年交流の家主催の限界突破キャンプは、事前キャンプで1泊2日、本キャンプで7泊8日という壮大なプログラムを計画し、実施することができるのでとても魅力的でした。またいつか、この事業に関わることができれば幸いです。

心をつないだ限界突破キャンプ

公益社団法人 日本山岳会群馬支部 支部長 根井 康雄 氏

登山者の立場から、限界突破キャンプの推進委員に加わらせていただきました。クライマックスとなる、黒檜山を登頂し、駒ヶ岳からさらに長七郎山、地藏岳を目指す日、駒ヶ岳の南の尾根で子供たちを待ちました。赤城青少年交流の家から登ってきて今朝、黒檜山の急斜面を登り、駒ヶ岳を越えてきた子供たちは、元気いっぱいでした。さすがに疲れもたまり、時間的にも厳しいということで、鳥居峠で計画を打ち切りましたが、時間さえあれば、まだまだ長七郎くらいは登れそうでした。

私が一番感激したのは、そんな子供たちの力強さとともに、会ってまだ数日なのに、子供たちの間でしっかりとコミュニケーションがとれ、チームワークができていたことでした。山登りには、人と人をつなげる不思議な力があります。特に子供たちにはそれが強く働くことを実感した瞬間でした。